

氏名	康 雯琪
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 3950 号
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	日本語の順接仮定条件表現の研究 —「モシ」文・「～バ」節を中心に—
学位論文審査委員	主査・教授 江口 泰生 教授 辻 星児 教授 宮崎 和人 准教授 京 健治

学位論文内容の要旨

康 雯琪『日本語の順接仮定条件表現の研究 —「モシ」文・「～バ」節を中心に—』は中世末期から江戸初期の文献を利用して、モシの働き・意味を具体例によって明らかにすること、従属節「～バ」の諸形式、すなわち、「動詞未然形+バ」・「タラバ」・「ナラバ」・「動詞已然形+バ」・「タレバ」・「ナレバ」の違いを明らかにすることを目的とした論文である。

既発表の活字論文 2 本、学会発表 5 本を中心とし、中世～近世初期の日本語の条件表現について論じたもので、40 字×34 行×217 ページ(300000 字弱)に及ぶ。

論文の章立ては以下のとおりである。

序論

本論

第 1 部 「モシ」の働きと意味機能

第 1 章 「モシ」の研究史

第 2 章 「モシ」文の主観性

第 3 章 中世末期における「モシ」文の用法の諸相

第 4 章 近世初期における「モシ」文の用法の諸相

第 2 部 中世末期・近世初期における「～バ節」の用法

第 5 章 条件表現の研究史

第 6 章 「未然形+バ」の用法

第 7 章 「已然形+バ」の用法

第8章 「～バ」節と主語の意味的偏在について—キリシタン資料の場合—

第9章 「～バ」節と主語の意味的偏在について—『虎明本狂言』の場合—

第10章 「～バ」節と主語の意味的偏在について—「動詞已然形+バ」の場合—

結論 日本語の順接仮定条件表現における「モシ」文・「～バ」節

参考文献

次に内容について述べる。本論文で対象とするのは、以下のような文型である。

若しこの事が洩れ聞えたならば、行綱まづ失はれうず。(天草版ヘイケ物語)

まず先行研究について膨大な文献を読み、それらの結論や学史的な問題点を系統立てて整理してある。

次にモシのある文について、出現分布や意味・働きなどを第1部で論じた。まず中世末期・近世初期のキリシタン資料・狂言資料において、モシは、仮定表現だけでなく、推量文、疑問文などにも用いられ、現代語の「モシカシテ」などと同じ用法を持ち、更に必ず先行する発話・状況を受けて、用いられているという特徴を指摘した。これらを踏まえてモシは、話し手が、先行する発話内容・状況と自分の意見との主観的な関連付けにより、一つの場面・事態を提示する誘導標識であると結論づけた。更に「喃本」を調査し、追認するとともに、更に文型の増加なども指摘した。

「～バ」節の違いについては、第2部で論じた。「動詞未然形+バ」・「タラバ」・「ナラバ」は、地の文に出現しないこと、文末表現に主観的な態度に関わる成分が多いこと、及び従属節の主語と主節の主語とが密接に関連することにより、極めて主観性に偏った形式であることを指摘した。

「動詞已然形+バ」・「タレバ」・「ナレバ」は、地の文に大量に出現すること、また「未然形+バ」より文末表現が多様な形で多く見られること、及び物語の「場面転換」を示す用法があることにより、主観性と客観性に跨る形式であることを指摘した。

結論ではこれらをまとめ、中世末期～近世初期の条件表現について、モシ、「～バ」節の意味や用法を明らかにし、「動詞未然形+バ」の衰退、「ナラバ」・「タラバ」の発達、及び「動詞已然形+バ」の拡張について具体例を綿密に分析した。

学位論文審査結果の要旨

審査会は1月29日(木曜)6時より文学部会議室にて、主査江口泰生、中世日本語にも造詣の深い辻星児教授、現代日本語の文法に詳しい宮崎和人教授、近世近代日本語の専門家である京健治准教授の4人で開催された。

まず、予備論文からどのように進捗したかを踏まえつつ、全体の要旨について本人からの説明をうけた。次に全委員から質疑応答を行った。

(1) 大量の先行研究に目を通し、完全に消化し、学史的な意味づけを加え、自分の

研究をその中に位置づけてある点、(2) 多くの用例を収集したという量的側面だけでなく、「嚙本」のように、あまり手つかずの文献例を自分の力で丹念に収集し、一例一例、文脈の中で検討してある点、(3) 条件表現には多くの先行研究があるが、モシに注目するという観点の独自性、(4) それらの結果、モシが仮定を導くだけでなく、むしろ蓋然性表現の類であることを導き出した点、(5) 「～バ」節の諸形式による意味の違い・用法を明らかにした点、(6) 台湾からの留学生でありながら、古い日本語文献を読みこなした学力・資質、などが高く評価された。

一方、(イ) モシのある文とない文との意味的な比較、たとえば反事実仮想などはモシが付きやすいのではないかといった点、(ロ) 起こりうる事態の確率の高低によってモシの付加に差があるのではないかという観点、(ハ) モシを副詞全体でどのように位置づけるかという点、(ニ) 「主観性」といった用語が1部と2部で若干異なっており、1部では本論文の主張する「主観性」が生起する要因にまで触れてあるが、2部では要因にまでは触れていないなど、1部2部によって用いられ方が異なっているという点、(ホ) 個々の現象を意味全体の中でどのように位置づけるかといった体系的側面、などは課題が残されているのではなかろうか、という指摘もあった。

質疑において、(イ) (ロ) についてモシが出現しない文型の整理は行っているが、用例数の多寡については今後の課題であること、(ハ) については接続的な機能も念頭に入れていること、(ニ) については1部と2部の「主観性」の用語に差があるが、2部で指摘した会話文のみに出現するという用法は、分布の指摘だけでなく、談話的な用法を洗い出す必要があること、(ホ) については以上を踏まえて、今後更に研究を進めていく考えであること、などが的確に応答され、今後の課題として積み残された点はあるものの、それらを把握しており、博士論文として十分な内容を持つものであることが確認された。

以上の審査において、本論文は博士の学位として十分に評価に値するものであり、これを認定することについて全員一致で合意した。